
新・クリスマス キリストさんの贈り物

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・クリスマス キリストさんの贈り物

【Nコード】

N7318F

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

三十歳を過ぎて童貞ならキリストさんが現れますよ。

(前書き)

電撃リトルリーグ、今回のお題は『新クリスマス』です。

<http://dengekibunko.dengeki.com/participation/league.php>

「今年も一人、か……」

白雪のちらつく街中。春樹君は一人呟きました。デパートには『クリスマス大売出し』と書かれた大看板がかけられており、大きなクリスマスツリーがちらほら置いてあります。周りには人目を気にせずイチヤつくカップルや、手を繋ぐ家族連ればかり。一人でいるのは、彼くらいです。

駅の中央広場で、ブーツとベンチに座っていました。自分などそこに存在していないかのように、彼に構う者はいません。時折女子高生の集団が後ろ指をさすだけ。

何故、僕はここにいるのだろう。何故、僕は街に来たのだろう

彼には恋人がいません。家族と過ごすクリスマスにも嫌悪感が生じる年頃。彼は逃げ出すように、街へと繰り出したのでした。

しかし、その自分の行動が、わかりませんでした。長袖の上に厚手のコートを羽織っているのに、十二月の冷たい風は彼の身を刺します。

帰ろう。春樹君は思い立ち、帰路を往きました。

街中の喧騒から少し遠ざかった、静かな路地。薄暗く、人の気配はありません。一人でいる春樹君に対して早く帰るよう急かすかのように、空は深く青みがかったです。誰からも声をかけられず、家に帰るはずでした。

「今年は、あんたでいいわね」

突然背後から声をかけられました。鈴のように透き通った美しい声です。

咄嗟に春樹君が振り返ると、そこには一人の少女が立っていました。冬なのに、雪のような白いワンピースを来た美しい少女でした。

チラリと覗く肢体は雪のように白く、それに反するかのように長い髪は黒い艶を出しています。目は大きく、ニコニコと笑う彼女の表情を一層引き立てていました。

彼女に見覚えはありません。春樹君は思ったことを口に出しました。

「君、だれ？」

よくぞ聞いてくれた、と言わんばかりに、彼女は得意気に話しはじめました。

「あたしは……平たく言えば、キリストの幽霊よ」

彼女から告げられた衝撃の事実。なんと彼女の正体は、あの有名なキリスト様だそうです。しかし、そんなことを簡単に信じる春樹君ではありません。

「キリストって女の子じゃないだろ」

「聖者の力で女の子の幽霊になったの！」

あからさまに怪しいですが、何が聖者の力だバーカ、なんて言うて怒りを買います。やんわりと話を進めることにしました。

「んで、そのキリストさんとやらが何の用だ？」

キリストさんは、春樹君の手を取りました。手を通じて伝わる温もりに、春樹君は一瞬ドキッとしました。

「あたしの役目はクリスマスを一人で過ごす寂しい男の為に一日だけ恋人になってあげることなの。毎年一人を適当に選ぶんだけど、今年のクリスマスはあんたが選ばれたってわけ」

彼女から告げられた衝撃の事実。なんと彼女の役目は、クリスマスを寂しく過ごす男に一晩の夢を与えることだそうです。寂しい男の烙印を押された春樹君は、ちょっとした苦笑いを浮かべました。

「物好きだな」

「聖者も色々暇なのよ」

彼女から告げられた衝撃の事実。なんと聖者も暇が嫌いなようです。だから女の子になったのでしょうか。しかし、聖者ほどになれば暇な時に女の子になれるのでしょうか。

「それで、あんたにその気はあるの？」

顔を近づけ、どこか嬉々として聞くキリストさん。しかし、春樹君の返答は以外なものでした。

「別に、俺はそんなの必要としてない。他のトコにいけ」

顔を少し強張らせました。本当は恋人というものが欲しかったりする春樹君ですが、どうしても、一晩だけの恋人になってくれとお願いする気にはなれません。

「な、何よっ、人の親切を無駄にして！」

頬を膨らまし、当然のように立腹するキリストさん。自分のような美少女が一晩だけ恋人になってあげるといつているのに、目の前の男は全く興味関心を示さない様子。そして

「じゃあな」

雪で滑りやすくなっている道を、走っていきました。

「あ、待ちなさいよ！」

急いで春樹君を追うキリストさんですが、曲がり角のところで見失ってしまうのでした。

「バカっ……！」

キリストさんは一人、路地に佇んでいました。

自室で十二月二十六日を一人で迎えた春樹君。窓からは明るい朝の陽光が差し込んでいます。頭を振って目を覚ますと、枕元に置いてある、小奇麗にラッピングされた箱に気が付きました。

母さんが用意してくれたのでしよう。一応箱を開けると、そこには一つの赤いマフラーがありました。

ぐちゃぐちゃに毛糸がほつれていて、所々太かったり細かったりと、とても完成度の低いマフラーでした。母さんが作ったマフラーではないようです。

首に巻いてみました。その瞬間、昨日の出来事を思い出しました。マフラーの温もりは、昨日出会った少女に触れた時の温もりによ

く似ていました。ふと箱を見やると、底のほうにあった一枚の紙切れに、何か書かれていました。

メリークリスマス

マフラーの温もりが、一層温かく感じました。

「メリークリスマス、キリストさん」

（後書き）

筆者の腕の中で寝息を立てるキリストさんが鬱陶しいのですが、どうすればいいでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7318f/>

新・クリスマス キリストさんの贈り物

2010年12月26日08時42分発行